

資格試験挑戦者たちの「ハッテミルカ」: 難解な法条文を 攻略する味方を得た!

第一章: 33歳の焦燥

中堅企業で働くSさん(33歳)は、焦りの中にいました。30代前半という年齢は、会社では責任ある仕事を任せられ始め、私生活でもライフイベントが重なるという多忙の中、一層の社会人としての成長を目指していました。

「今の知識のままでは、実務の課題を自律的に解決できない……」。そう痛感した彼は、知財管理技能士への挑戦を決意します。しかし、現実是非情でした。平日は9時から17時まで勤務し、帰宅後や週末は家庭の用事に追われます。独学で始めた分厚いテキストは、毎日カバンに入れて持ち運んでいます、開く機会がない。隙間時間を活かして開いても、どこから手を付ければいいのかさえ分からなくなっていました。

第二章: 挫折しかけた「学習計画」

Sさんは、当初自分なりに立てた「毎日2時間学習」という計画に早くも行き詰まっていた。「今日も残業でできなかった。週末にまとめてやろう……」しかし、週末になれば溜まった家事や付き合いが彼を待ち受けています。従来の画一的なカリキュラムでは、自分の既にある知識も、足りない弱点も混ざり合い、効率の悪さにモチベーションはどん底でした。

「このままでは、また不合格の文字を見ることになる。」そんな時、彼が出会ったのが「ハッテミルカ学習法」の電子書籍でした。

第三章: 自分だけの羅針盤「知財メータ」

Sさんは、ハッテミルカの肝である「知財メータ」を起動しました。彼はまず、これまでの業務経験から既に理解している条文を「OK」に、全く馴染みのない条文を「未実施」に仕分けていきました。

画面に現れたのは、残酷なまでの「現実」と、一筋の「希望」でした。「今の俺の実力は、合格レベルまでこれだけ足りないのか」。しかし、同時にハッテミルカは彼に教え

てくれました。「試験は 100 点を取る必要はない。合格ラインを Just in Time で超えればいい」ということを。

彼は、未実施の項目を試験日までの日数で割り振り、無理のない再計画を立てました。残業で計画がズレたとしても、「努力の見える化」機能によって、自分が積み上げた「進捗」が青いバーで表示されます。それが、折れそうな彼の心を繋ぎ止めました。

第四章：過去問は「敵」ではなく「味方」

学習を進める中で、S さんはこのメソッドの真髄に触れます。それは、条文の下に“貼ってある“過去問“は、実は味方だという気づきでした。

例えば、著作権法第 15 条を見てみると、そこには 2 級と 3 級合わせて 14 回もの過去問リンクが貼られていました。「過去問は、解いて終わりにする敵じゃない。条文という本質を、多角的に照らし出すための“味方”なんだ」。

問い方が変わっても、その根底にある条文の本質さえ掴めば、正解に辿り着ける。この確信が、彼を「暗記の苦しみ」から「理解の楽しさ」へと解き放ちました。

第五章：そして、実務のリーダーへ

試験当日。S さんの目に映る問題文は、もはや「難解な暗号」ではありませんでした。結果、彼は 3 級と 2 級の学習を並行して進めるという効率的な道を通して、見事連続合格を果たしたのです。

手に入れたのは単なる免状ではありません。条文の本質を理解した彼は、職場で自律的に課題を発見し、知財戦略を立案できる「実務リーダー」への第一歩を踏み出したのです。また知財技能士 2 級との国家資格の称号は大きく、名刺交換する協力会社役員からも、“知財が絡む案件も安心して一緒に進めることができる”と高評価を得られています。

2026 年 2 月